水辺だより

1994年10月

１０月１日のイベントがなんとか終了しました。“無事終了”とは言い難いドタバタのイベントでした。映写装置の故障のため、進行がスムーズに行かず、講演者の内山さんや開場に来られた方々に迷惑をおかけしました。お詫びいたします。

入場者は約１５０人、講演の内容は好評でもう少し時間があればもっと良かったと思いました。その分、夜の交流会では話足りなかった内山さんが多いに語り、他の皆さんからも聞きたかったことや、自分の周りの水辺の話が次々出て、なごやかな宴となりました。

このイベントの収支は、１１万円ほどの赤字となりました。けれど小川の増自然の売上金もあるし、それ以上に実りあるイベントでしたので、これでも良いかな と感じています。

映画「阿賀に生きる」の上映会が行なわれます。

日時　１１月３日（祝日）　夕方６時～８時半頃

場所　五十嵐中学校

参加費　￥600　　同封のみどり色のチラシをご覧ください。

これは家族券として使え、１枚あれば家族で入場できます。

映画上映後、大熊先生がお話する時間もあります。

水辺ウォッチング『三面川（みおもてがわ）・荒川（あらかわ）』

１１月１３日（日）午前10:30～村上駅集合

新潟方面から電車で来る方は、新潟発8:57－村上着10:18

いなほ3号 新潟発9:24－村上着10:08

見学予定地
- 三面川　鮭公園
- 前小川改修（三面川支流）　会員の高橋博愛さん（朝日村の）
- 荒川、カジカの養殖場　会員の松田繁雄さん

弁当持参

子連れ 友達づれ 大歓迎！

☼ 移動は、自動車に乗りあわせて適当に動くこととします。

☼ 参加費用は、特に必要ないですが、車を出してくださる方へ、若干のガソリン代を出したいと思いますので、ちょっと用意してください

参加希望者は事務局へ１１月５日までに連絡をお願いします。

県北の三面川は、いま、鮭がのぼる季節です。
岸辺から、鮭のせなかがきらめくのが見れるかもしれません。

新潟の水辺を考える会
〒950-21 新潟市大学南1丁目7821-5
電話 (025) 263－２７３３

水辺のリレーエッセイ
第9話

少年の頃の水辺を懐かしむ

池田則雄（７２才）

わが７０年の人生のうち、水とのかかわりで特に懐かしく思うのは少年時代にある。

私は坂井輪村大野郷屋（現在新潟市大野）の西川ほとりで生れる。

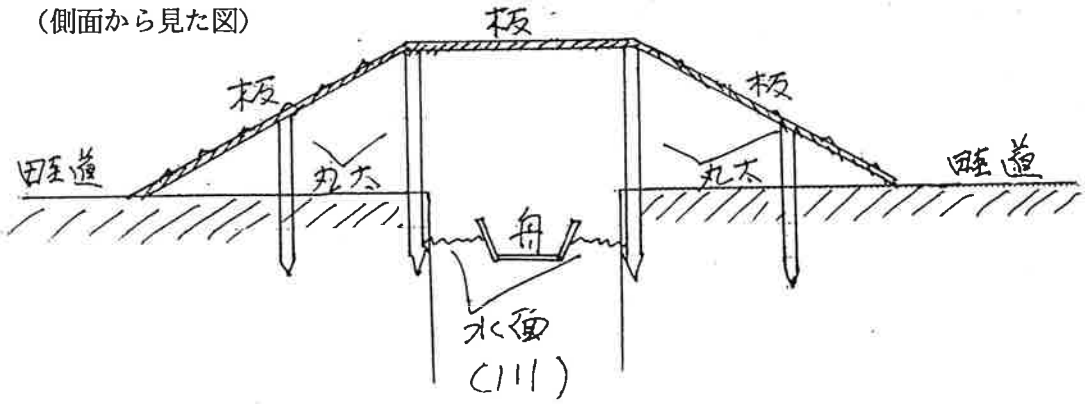
当時６０才の祖父は仕事をしていなかったのでいつも川に釣に行っていた。学校の休みにはよく連れて行かれた。祖父の釣り場所は新川や西川などの大きな川でなく、その支流の小川（川巾は２間そこそこで「ど」と呼んでいた。）である。釣竿は１間から１間半の手製の一本竹に、餌は「みみず」である。つれる魚は鮒が主体で時にはなまづやどじょうに、あるいははさみに毛が生えているかわがに（今は全く見られない）がかかった。

じっと水面を見つめて待ち、浮きの動きに合せて竿をあげるタイミングが釣のこつであったように思う。

当時の「ど」は田園の中を縦横に走り、それは田植え時の苗運びや稲刈時の稲運び舟の大切な通路の役目を果し、稲架場（はさば）まで稲を運んだ。

「ど」にはところどころ橋がかかっており、それは約３０センチ巾で舟がくぐれる高さで丸太杭にとめられていた。

（側面から見た図）



「ど」の川べりには沢山の菖蒲があった。６月の節句にそれをとってきて、軒先に差したり、風呂に入れ菖蒲湯をたててもらった懐かしい行事の一つとして覚えている。

田圃の耕地整理で稲架木は切られ、乾田にかわると農家では舟がいらなくなり、「ど」と共に消えて行った。

春さきには産卵のため糸魚という小魚が新川から「ど」へそして田圃にも入ってき

た。子供らは家から笊を持ち出し糸魚をすくって遊んだ。

また、夏になると西川への水門が閉じられるためと思うが、内野あたりは水無しの川となり、川底の土砂が現れる。そしてところどころの窪みは水たまりとなって魚が退避する。その魚をおっかけて遊ぶのである。

川底を歩くと足音で小さな蟹が穴から穴へと横に走る。乾いた西川で時を忘れて遊んでいた。

当時の西川は大切な交通機関でもあった。だるま船などが往来し、ものの運搬や時には人も乗せることがあった。

かつて８月２２日，２３日は新潟まつりで、夜は川開き花火が打ち上げられた。

万代橋から白山神社寄りの川べりには桟敷が設けられ、花火を見物したのである。

私が小学校５年の時と思うが、１回だけ船で花火見物に行った。内野７番町の西川船付場からだるま船に乗り夕方４時頃出発、船はトントンと音をたてながら万代橋に向って下った。船の中で携行したお重箱の夕食を食べ、花火のあがるのを待った。

花火見物が終り、西川を登り帰り着くともう０時を過ぎていた。

西川の土手を歩いて見かけるのは白い帆をかざした舟が弥彦山に向って進んで行く姿である。すすきの間から見えるその動きは実にのんびりして絵を見る思いであった。

耕地整理以前の田圃は年中水鏡で冬には氷がはった。これを「ざい」と呼び、ざいわたりに行こうといって友達を誘い、ゴム長で、ざいの上をおっかなびっくりわたって遊んだ。その頃は足駄の歯を抜いたものに金具を打ちつけ、今で云うスケートとして滑ったものである。特に寒さの厳しい冬には西川が凍りついたこともあった。

こうしてわが少年時代には四季折々に水とかかわってきたことを考えると、無いもの欲しさで云うのでないが、水辺に対し無性に懐かしさがつのるのである。

次回は　石月升さんに　お願いします。

四川省奥地紀行　その１（大阪から九寨溝（きゅうさいこう）まで）

八木　栄子

会社を辞めた後、４月の終わりから２ヵ月間インドネシアへ旅立ち、多くの人の予想を裏切り、無事日本へ帰国して、「これで当分外国へは行かなくてもいいかなあ」と思っていた矢先に一枚のツアーの案内が目に止りました。それは〈浄めの水・歓喜の水　中国四川省「九寨溝（きゅうさいこう）」への旅・参加募集　第１６回中国観気旅行＋第１回国際エコロジーキャンプ〉というものでした。主催は関西気功協会、（財）キープ協会環境教育事業部、北京康養生学研究所で、９月５日から１５日までで、費用は約４０万。費用に少し戸惑いがあったものの、来年は何しているかわからないし、なによりも《水》に心ひかれ（水辺の会の会員だなあ）中国行きを決めました。今まで、中国にいきたいなあとは漠然と考えてはいましたが、こんな形で実現するとは思ってもいませんでした。なんとなく、「とうとう中国だ」でした。

開港したての関西新空港から、大阪と同じように蒸暑い上海まで２時間です。上海の空港の入口で時間を潰している間、ツアーのメンバーである音楽家たちがそこらへんに座り、ギターをひき、タブラを叩き、ウクレレをはじめました。空港の中に入って飛行機を待っている時、団長の津村喬さんが「それではみんなで香功（シャンゴン）でもやりましょう」とみんなで輪をつくって気功を始めました。私は「やっぱりこのツアーはちょっと普通じゃないなあ」とつくづく喜んでいました。津村さんを見ながら香功をやっていたら、なんとなく時々いい香りがしたように思ったのは気のせいだったかな（香功（シャンゴン）はやっていると香りがしてくる気功と言われています）。

上海から四川省の成都（せいと）までは、やはり２時間です。その日は成都のレストランで夕食を食べました。この時に四川省がマーボー豆腐のふるさとであることを実感することになりました（でも、その後の経験から言うと、四川省はとても広いので場所によって料理はかなり違い、辛くないところもありました）。辛いの苦手な人にとっては、地獄のような食卓だったはずです。

次の日は朝５時半に起きて、九寨溝に向けて出発です。バスの窓から見える移っていく成都の町中の様子は、何となく東南アジアを思わせるところもあり、「南なんだなあ」と眺めていました。と、のどかそうな風景とは逆に、バスは舗装道路を暴走車のように、すごいスピードで走って行きます。追越しも日本では考えられないような危険な状況で実行され、クラクションも追越すまでブーブーブーとならし続ける状態で、「私にはとても中国で車の運転はできんなあ」と、運転手さんとにかくあんたに命あずけた状態の心境でした。運転席の隣に座っていた人曰く、「ここで、ビデオを撮って映画にしたら、どんな恐怖映画よりも絶対こわい。怖くて、ねれなかったよ、おれ。」

成都の郊外に入ると、農村風景が広がっています。けれど、なにやら大きな建築物もあちらこちらに建設中で、郊外の農村風景が確実に変化しつつあるのです。

成都から第１目的地の九寨溝までは、バスで１日半かかります。バスの中では、外の景色を眺めているか、寝ているか、何か食べているかの３つの行動パターンしかありません。わたしが乗っていた２号車には、前述の音楽をたしなむ人たちがいたために、静かな生演奏付で、楽しい気分でした。また、窓から眺める景色は、日本とのスケールの違いを感じさせ、「これはドキュメンタリー番組の取材っぽいなあ」気分でした。

途中からの道は凸凹道で崖崩れも多いところで、もう日本では経験できないような悪路です。谷側に座っている場合、むやみに下をみると危険です（こわくなるので）。とにかく生きて帰れればいいなあと半分本気で祈りました。

成都を出てから、昼食を食べたところは、既に小数民族の人達が住んでいる地域です。食堂の近くに市場がたっていて、リンゴ、ナシ、ブドウなどの果物や豆類、香辛料や乾物などが売られ、私たちは主に果物を買いこみ、バスの中の友としました。リンゴは日本のものより一回り小さめで、なんとなく素朴な美味しいものでした。バスの中から、道路に沿って土ぼこりだらけになってい

るリンゴの木をよくみかけました。

２日目の宿泊地は松潘です。一日バスに乗っていたので、みんな多少疲れぎみでしたが、この日の夜に、やっと全員で自己紹介をして、中国側のコーディネートをしてくださっている王先生のお話しと、音楽家たちの演奏を聞きいよいよ明日は九寨溝です。

つづく

九寨溝へ向う途中　明江岸辺にて

番外編　その１　食事

今回はツアーにすべて食事が含まれていました。そのため、いつもごちそうで、１０年分くらいの中華料理を食べてきたようでした。食事のパターンとしては、円卓に座り、一人一人には箸と小皿と小さなお腕があてがれ、大皿で出てくる料理を、とにかくそれだけの食器で食べます（日本のレストランみたいに、皿を変えてくれることはほとんどない）。そのため、最後には味が混ざっ

てしまいます。

大体、１グループが８～９人くらいで、大皿は１０品以上くらい出てきます。これで終わりだろうと思っていても、まだ出てきます。そして、ほとんど最後に近くなってから、ごはんが出てくる場所が多く、どうしておかずがいっぱいある時に、出してくれないんだーと心の中でうらめしく思っていたのは、きっと私だけでないと思います。

そして、当然いつも料理は余ってしまいます。一体、これはどうなるのかあ、捨てられるのかなあ、と思いつつ、なんともいえない申し訳ない気分になってしまいます。ただし、中国の慣習として、人をもてなすときは料理が余る方がよい（お腹が一杯になったという意味らしい）という話しも聞くので、背景には日本人との考え方の違いもあるのでしょうね。

本文にも書いたように、四川省で食べた料理はとうがらしや山椒などの香辛料を使った料理が多いように感じました。基本的に辛い。内容は、肉が多く出ましたが、野菜も種類が多く、冬瓜のいため煮などによく出会いました。場所によっては、豆腐料理が名物の所があり、皆懐かしく喜んでいただきました。朝食は、お粥と中華まんの皮だけのおまんじゅうと肉まん、ゆで卵、ピータンはどこでもでてきたようです。最後の上海のレストランで、中国で初めて酢豚と再会し、その甘酸っぱい味が非常に親しみのある味に思えてしまいました（そこは広東料理のお店でした）。ホテルの朝食で初めてシューマイなどの点心料理に出会い、中国のような広い国では、場所によって料理が違うのはあたりまえなのに、今更ながらそのことを実感しました。

本当は、町中で見る屋台や小さな食堂とか、とってもおいしそうで、もう高級料理はいらんから、町中で自由に食べたいよーと思いましたが、それはきっとまたの機会をつくればいいことですね。

わたしは基本的に食べ物に対していやしいので、お腹が一杯なのに新しいお皿がくるとつい手をだしてしまい、そのせいかどうか帰国してから一週間お腹をこわしました。料理のほとんどが油炒めだったせいかもしれません。中国へ行かれる時は、みなさんも食べ過ぎに気をつけてくださいね。

それにしても、１０日間、全ての食事を２５人前後で一緒に食べるという経験も、なかなか貴重ないい体験でした。

八木栄子さんからの

☆番外インフォメーション☆

その１　宇宙物理学者　佐治晴夫（さじはるお）さんの講演会をまたやることになりました。

今年の３月に万代市民会館で行った講演会の反響がとてもよかったために、また新潟へ来ていただくことになりました。詳細は、同封のチラシをごらんください。前回、来られなかった方もいらっしゃった方も、ぜひいらしてください。

できましたら回りの方々にインフォメーションしていただければとうれしいです。今回は、できるだけ前売料金で販売したいので、チケットが必要な方は、八木までチラシに書いてある方法でご連絡ください。

また、チケットを預ってくれる方も募集中です。いいよと言う方は、ご連絡ください。どうぞよろしくお願いします。

その２　津村喬（たかし）さんの講演と実技指導《気功への道　IN 新潟》が開催

１０月３０日（日）新潟市浜浦小学校体育館にて

午後１時受付開始　１時半開講　４時半終了

参加費　2,000円 当日でもOK

主催：新潟樹林気功会（TEL025-289-2697 熊倉）

八木が中国へ行くことになったのも、津村さんが代表の関西気功協会の関連です。津村さんは、日本の気功指導の第一人者で、最近は「地球市民企画室」の設立など、地球環境問題に関して積極的な活動を展開しています。きっと、気にいると思います。ご興味のある方は、ご参加ください。

論 RON 観 KAN

近自然河川工法とは

大熊 孝

二一世紀を間近にして、近年、地球環境問題との絡みから「自然との共生」が論じられ、さまざまな具体的な試みが始められている。なかでも、身近な自然との共生という観点から「近自然河川工法」が注目を集めている。

「近自然河川工法」は、ドイツ、スイスを中心として約一〇年ほど前から本格的に実施されるようになったものであるが、この思想が日本に紹介されたのは愛媛県五十崎町の「町づくりシンポの会」の有志が一九八六年にスイスに視察に行ってからである。その後、この思想の普及とともに、一九九〇年一一月には建設省によって「多自然型川づくり」の通達が出され、日本でも川における自然環境の復元が実行されるようになってきた。

建設省指導による多自然型河川工法の実施箇所は、すでに、全国で千数百箇所に上るといわれている。だが、筆者が見たかぎりでは、その多くがいまだに〝反〟自然河川工法にすぎない状況にある。それは、自然と共生するということの本質がよく理解されていないからではないかと考えられる。そこで、日本での近自然河川工法のどこに問題があるのか少し筆者の見解を述べてみたい。

まず問題となるのは、自然をどのように考え、どう認識するかという点にある。筆者は、自然とは、「生命の誕生～成長～消滅の循環が、何十億年という時間のなかで、場所ごとに変化・集積している体系」と考えている。すなわち、場所ごとに、時間ごとに異なるとともに、時間がゆっくりと重ねられている点にこそ自然の意義があると考えている。そして、人間の営みは、その自然のリズムにあわせ、ゆっくりと時間をかけて形成されたものであり、それが「文化」と呼ばれるものではないかと考えている。

しかし、近代以降における人間の営みは、経済効率を求め、短兵急に成果ばかりを求めてきた。「急がなければ豊かになれない、急がなければ幸せになれない」かのように、みんな急いで自然を造り変え、災害を克服し、資源を収奪し切ってきたのである。すなわち、場所ごと、時間ごとに異なっていた人間と自然の関係をすべて短時間に画一的に平等化することに血道をあげてきたのである。それが、近代化、文明化といわれるものであったが、ゆっくりと時間をかけて造られてきた自然と人間の関係である文化は破壊されてきたのである。場所ごとにゆっくりと重ねられた時間が欠如した関係は、潤いがなく、しっくりいかず、まがい物にしかならず、何よりも美しさを欠くものが多いのである。

私の専門は河川工学であるため、よく次のような質問を受ける。すなわち、「ヨーロッパと日本の自然条件はそもそも異なるものであり、ヨーロッパでうまれた近自然河川工法という技術は、急流で洪水規模の大きい日本の河川には、適用しにくいのではないか？」という質問である。この質問は、一見自然条件の違いに留意しているようであるが、近自然河川工法そのものに普遍的な技術があり、それが近代的技術のように短時間に適用できると考えている点に問題があるように思う。

近自然河川工法は、人間の都合で自然を改変するのであるが、人間の都合をできるだけ抑え、自然を尊重し、それにできるだけ近づけるということに基本思想がある。したがって、場所が変わり、時間が変われば、それに応じて工法の方も必然的に変わるものなのである。洪水規模が大きければ、それなりの自然と人間の関係が形成されているのであり、それに応じた工法があるはずである。すなわち、一方的に洪水を克服するのではなく、水害にあいながら形成されてきた文化を尊重し、洪水とどう折り合いをつけていくかが、日本における近自然河川工法の要点であろう。

近自然河川工法の本質は、人間と自然の関係にゆっくりと重ねられた時間を取り戻すことにあるといえよう。そこに、人間と自然との共生の道が残されているのではないかと考えている。

Okuma Takashi
新潟大学工学部教授。専門は河川工学。NACS-J 河川問題調査特別委員会委員、千歳川問題専門委員会委員。

「自然保護」10月号
(財)自然保護協会 発行.

【新入者登場のコーナー】（とりあえず最終回）

－知野（ちの） 泰明（やすあき）－

突然ですが，このコーナーは今回で終わらせて頂くことになりました．理由は，前回にも触れた様に，私の就職（日本大学工学部）が決り，新潟を離れることになったため，今後，この連載が続けられるか分らなくなったからです．まったく勝手で申し訳ありません．

では，早速，予告テーマでした江戸時代の２大幕府治水技術流派「関東流」，「紀州流」についてお話しすることにします．明治末期より『江戸幕府の治水技術は開幕初頭に起った「関東流」が中心となり，江戸時代中期の享保年間（1716～36）からは，「関東流」を受継いだ「紀州流」が幕末まで幕府治水技術流派として存在した』と言われてきました．両流派の治水方針は対称的で，「関東流」は下流部の洪水を防ぐために上，中流部に不連続堤（いわゆる霞堤）や遊水部を設け洪水を，そこで滞留させる方針を採ったとされました．これに対して「紀州流」は洪水をできるだけ河道内で流しきることを主眼として，堤防の連続化を進め，堤防の巨大化を招いたとされました．このように，現代につながる治水方針の始りが江戸時代中期に求められたのです．

しかし，最近になってこの評価を疑問視する意見が史学，工学の両方から出されるようになりました．その提起者の一人に他ならぬ大熊先生がいらっしゃいます．

疑問意見の中心は，詳細な調査を進めていくと江戸時代の中期から幕府の河川改修に見られる治水技術が極端に変化したという形跡はみられないというものでした．こうした意見の相違が生み出されたのは，明治以来の評価が，一部の近世治水史料によって形成されたことに大きな原因があったのです．そこで，私はこの意見の対立を解決するためにも，江戸時代の治水技術を明らかにする研究を開始したのでした．

私のこれまでの研究結果によると，明治の評価で利用された史料のみでは江戸中期からの極端な治水技術の変化は結論づけられないことが分りました．それら史料から当時の堤防技術に関して言えることは，堤防の巨大化を推進するような指示はみい出せず，江戸中期から堤防の急勾配化が進んだ形跡だけはみい出せることなどでした．また，各河川改修史の調査によると，江戸時代初頭に初めて築堤が行われたある河川では，上流部の伐木による流出土砂の増加により，江戸時代を通じて河床の上昇が進み，結果的に堤防の連続化と巨大化が

進んでいったという事例がみられました．あるいは，江戸時代を通じて不連続堤による洪水の滞留を利用した治水方針が採られた河川もみられました．

このように江戸時代の治水方針は，各河川や藩によって異なっていたのです．また，江戸時代に一河川の治水を統一的に行うには，沿川に入組む多数の領地の利害関係を調整しなければ推進することはできませんでした．上流から下流まで流域全体を見通した治水を行うことが難しかったのです．

以上のことから，明治以降から言われるようになった「関東流」と「紀州流」による幕府治水方針や技術への大きな影響はなかったと言えそうです．そして，両流派が採ったといわれる治水方針は，種々の河川の状況に応じて江戸時代初頭からそれぞれ存在していたことがわかりました．さらには，これらとは別に，領地が入組んだ河川では各領地を守るための築堤や改修を行うことに終始していた流域も多数存在していたのです．

詳細に江戸時代の治水技術を明らかにするには，まだまだ個別の研究が必要ですが，これまでの研究結果からすると，明治末期の評価が生み出された理由は近代の治水方針の責任を瓦解した前国家体制に転嫁しようとしたことにあるとさえ考えたくなりそうなのが実状です•••．

これまで４回にわたり，私のつたない文章におつき合い下さった皆様，誠にありがとうございました(^_^)．反響を呼ぶまでの企画にすることは出来ませんでしたが，皆様から川を歴史という側面から考える楽しみをかいま見て頂けたとしたら著者として幸いです．それでは，また機会がありましたら宜しくおつき合い下さるようお願いしながら，失礼いたします．　　（おわり）

知野さんは，10月1日より，福島県郡山のほうで，大学の助手をなさっています。若い先生として，ちょっと若い学生さん達と，またまた学究の日々につかっていることでしょう。

新しい発見がありましたら，水辺の会に情報を送ってくださいな。

連載ありがとうございました．

川口

今後の予定

- 11月3日（祝日）映画「阿賀に生きる」の上映
- 11月13日（日）水辺ウォッチング『三面川・荒川』

・地域づくり交流研修のお誘い

11月11日（金）午後2時～5時ごろ

場所　新潟県新潟地区合同庁舎会議室

テーマは『水のある風景を考える　～ウォーターフロント空間の活かし方』

◎参加を希望されるかたは10月中に、水辺の会事務局にご連絡願います。

・勉強会＆忘年会

12月3日（土）午後2時～

場所：県民会館

勉強会『伝統的河川工法／ドイツの水辺景観』＆忘年会

■「伝統的河川工法」　林　和彦さん

■「ドイツの水辺景観」　高橋正良さん

忘年会は　会員の星島卓美さんの店です。

場所：番小屋（堀之内32、鳥屋野農協の上）

夕方6時～

◎忘年会は人数把握の必要がありますので、参加希望者は

11月末までに、水辺の会事務局にご連絡願います。

編集後記

三面川の河口近くで、きのう　鮭が　ハネるのを見ました。　鮭をつかまえるために、川を横断する堰のような、やな場のような、木製（or竹製）の構造がつくられていました。　ここを通過せずには上流に行けない、捕まりたくはない。…鮭も悩んでいるのだろうな…　自然に産卵をまっとうさせてやりたいと思う。けれど、私は、ハラコめしをバクバク食べるのが好きである。ああ…。

川口（米）94.10.24.